

【寄稿】CTO時代の思い出



私は2003年11月に製商品開発担当の執行役員として採用いただいて以降、直近の2年強にわたる技術顧問期間を含め、15年以上の長きにわたりバルカーで勤務させていただいております。その間、2010年4月から4年半、CTOを務めさせていただきました。前任者の五十嵐氏は、基礎領域から応用まで広く化学の知識と見識をお持ちで、実用的な技術を重視してきた私にとって、CTO在任中も貴重なアドバイスをいただけるありがたい存在でした。CTOに任命いただいたときの緊張感を経験して初めて、CTO在任中の飄々とした五十嵐氏の風韻に感心したものです。

ところで、私をもっとも印象に残っているひとつに、バルカーに入社した当日の奈良研究所出張があります。社長のご指示で、入社初日に当時の城谷常務にご案内いただいて、奈良の研究所員全員を対象に、謂わば、所信表明をしました。私は、企業収益に貢献するR&Dの必要性を強調したと記憶しています。昨今は、企業でのR&Dは企業収益に貢献すべしという考え方は当然になっていますが、当時は、バルカーに限らず、企業でのR&Dの中にも公的な研究機関並みの中長期的なR&Dという考え方が底流にあって、企業収益に貢献するR&Dを強調すると、それが生々しすぎて、当時の研究者には受け入れにくい面もあったようです。ところで、この出張は、日帰りでしたが、京都で近鉄線に乗り換え、田園地帯に立地する研究所へ行くのですが、その後、CTO時代を通して、幾度、この地を訪れたことか。それにしても遠かった(上海の方が時間的には近い)。その割に、残念ながら、橿原神宮以外には近隣に足を運んでいないので、改めて、旅行してみたいと思っています。

R&Dにおいては、人材育成と共に社外との人的ネットワーク作りは大きな課題です。特に中国など海外で研究・開発活動をするには、大学の先生方との適切な協業は不可欠です。当時、私も日本の大学や欧米諸国の大学との共同研究といったことには経験がありましたが、中国の先生方との共同研究は経験がありませんでした。大学などの公的機関の研究者の社会的な貢献について、日本では社会的にかなりの議論がありましたので、共同研究の求める成果については、かなり具体的に事前に規定するようになっていました。一方、中国では、こうした経緯がなかったので、中国の先生方に、期待する成果を説明し、R&D Programの目標を設定するというやりかたには、当時、かなりの反発がありました。社会的・文化的な背景には、相当の配慮が必要だと痛感させられたケースです。

最近、まったく異なる分野から、適用性の広い技術シーズが生まれている可能性が以前より高まっているように思いますので、研究の門戸を広く開け、他社あるいは他の研究開発機関との交流を深めることが益々、重要になっています。それらを通して研究者の視線を世界レベルに高めることで、研究所をより高度な価値を生み出す組織へ変革し続けることが今後とも重要な課題だと思います。

日本バルカー工業株式会社 元CTO 黒田 博之